

## 採材方法の勉強会を開催しました！

【秋田森林管理署】

平成 26 年 7 月 16 日（水曜日）、一般材生産の向上を目指した「採材方法の勉強会」を開催しました。

この勉強会は、B 材の市場性が高まったこと等により、丸太の価値を上げようとする意識が希薄化し、造材に手間をかけない現場が増えていることを踏まえ、川下の製材工場の参加も得る中で、秋田県内の素材生産事業者等の現場技能者等を対象に開催したものです。

参加者は、講師の製材工場 5 社をはじめ、県内の 8 森林組合及び素材生産事業者 24 社のオペレーターなど 39 名、秋田県（各流域フォレストチーム員ほか）、各森林管理（支）署など、総勢 90 名が参加しました。

午前は、秋田森林管理署管内の製品生産事業現場（秋田市河辺三内字財ノ神国有林 243 林班）において、伐倒木の採材の仕方（点付け）を参加者全員で検討し、高性能林業機械により玉切りまでを行い、最終的に丸太にした際の感覚を確認しました。

また、既に採材済みの丸太について、曲がり等が許容範囲となっているか、講師からコメントをいただき、参加者で認識を共有しました。

午後からは、秋田市河辺戸島にあるアスクウッド（秋田製材協同組合）を視察した後、講師から、製品規格や造材についてどのような要望を持っているか等に関して説明していただき、意見交換を行いました。

意見交換では、講師から、曲がりやガニ腐れ、かねつけ（黒芯）、寸切れ等に関する要望が出され、これに対して現場の実態や工場側の認識を確認するとともに、川上・川下の認識の共有に向けては、双方の現場を見ることが大切との意見も出されました。

今回の勉強会では、川上・川下の双方で採材予想の目合わせや議論をすることができ、有利販売に繋がるような機会になったと考えています。

一方で、良質材生産のためには、より一層双方が連携し取り組んでいくことが重要であり、特に川上においては、製材工場に出向いて実際に挽いている丸太、製品を確認するなど、川下とのコミュニケーションを促進する必要があると考えています。

なお、詳しい内容については、次ページ以降をご覧ください。

## 採材方法の勉強会を開催 ～ 一般材生産の向上を目指して ～

### 1 はじめに（開催の趣旨・目的）

林業にとって需要者に供給する最初のプロダクトは丸太であり、製品である丸太の玉切りの仕方を決める「採材」の技術は、商品力を高め、採算性を高めるための重要なスキルです。しかし、昨今は、B材の市場性が高まったこと等により、丸太の価値を上げようとする意識が希薄化し、造材に手間をかけない現場が増えている感が否めないと考えており、実際に秋田県内の各森林管理（支）署の製品生産事業請負においても、一般材の生産比率では10～50%（平成25年度実績）と幅が見られ、有利採材となっていない現場もあるところではあります。

このため、川下の製材工場の参加も得る中で、秋田県内の森林組合及び素材生産事業者の現場技能者等を対象に、一般材生産の向上を目指した採材方法の勉強会を開催し、川上・川下関係者の認識の共有及び採材技能者の育成に資することを目的に開催したものです。

なお、秋田森林管理署については、国有林野事業が一般会計に移行した平成25年度において、民有林と連携した施策の推進に関し、中心的な役割を担う署として、県内の森林管理署等を代表する署に位置付けられたところであり、今回の勉強会は、民有林支援にも資するべく、参加者も県内全域を対象としたところです。

### 2 開催日時・場所等

平成26年7月16日（水曜日）

- 採材の仕方（点付け）検討会 9:55～12:05（秋田森林管理署財ノ神国有林243林班）
- 工場見学 13:00～13:40（アスクウッド（秋田製材協同組合））
- 意見交換会 14:00～15:40（秋田県林業研究研修センター）

### 3 講師・参加者

#### （1）講師

秋田県森林組合連合会販売課長、東北森林管理局企画官（供給戦略）、製材工場（①アスクウッド業務部長、②（株）くどうはじめ材木店専務取締役、③早口木材（株）代表取締役、④（有）佐東製材所専務取締役、⑤（株）門脇木材代表取締役）、秋田県林業研究研修センター研究普及指導室研修班長

#### （2）参加者

秋田県内の8森林組合及び素材生産事業者24社のオペレーター等39名をはじめ、秋田県（各流域フォレストチーム員ほか）、各森林管理（支）署など、総勢90名

## 4 勉強会の概要

### (1) 現場での採材の仕方（点付け）検討会

秋田森林管理署管内の製品生産事業現場（秋田市河辺三内字財ノ神国有林 243 林班）において、5班に分かれて伐倒木の採材の仕方（点付け）を検討・発表するとともに、高性能林業機械により玉切りまでを行い、最終的に丸太にした際の感覚を確認しました。

検討の中では、①事業体によって、採材の方法・考え方に若干の差異が見られたこと（例：需要の高まっている 3m を取るか、或いは合板用の 4m を取るか）、②曲がりに対して、どこまで許容されるのか不安を抱えていること（長級 4m のものについて、玉切り後に矢高を計測したところ 7cm あったが（径級は 20cm）、合板用材であれば、加工ラインにおいて半分の 2m にすることから、許容範囲内との講師の見解）が認められました。



採材の仕方（点付け）を検討



玉切り後に採材の仕方を検証

また、土場において、既に 2、3、3.65 及び 4m に採材した丸太について、曲がりや腐れ等が許容範囲となっているか、講師からコメントをいただき、参加者全員で認識を共有しました。



採材済みの丸太の良し悪しを検討

### (2) 意見交換会等

午後からは、秋田市河辺戸島にあるアスクウッド（秋田製材協同組合）に移動し工場見学を行い、その後、同所の秋田県林業研究研修センターの研修室に移動して、講師（製材

工場等)から、製品規格や造材についてどのような要望を持っているか等に関して説明していただき、意見交換を行いました。

#### 【講師(製材工場等)からの主な要望】

○材の曲がりについては、なるべく直材がよい。曲がった材を挽いた製品は乾燥すると曲がってしまう。工場内で分かると直ぐに対応できるが、出荷してからではクレームや返品となることが多い。

○ガニ腐れやトビ腐れが多いとチップの割合が高くなり、採算が合わなくなる。

○かねつけ(黒芯)や大きい節があると困る。かねつけは水分が抜け難いのと、色が黒く商品にはならない。また、風倒木やモメ傷がある材は、強度が弱く使い物にならない。

○用途に合った採材をお願いしたい。良い物は一般材に、悪い物は合板、チップに。2mも板材に挽いており、若干の曲がり可。

○伸寸がなく、材長が規定の長さ未満で採材している丸太については、商品として通常の販売はできない。商品としての丸太の生産管理を現場の皆さんにお願いしたい。

#### 【意見交換(主な意見等)】

##### ア 曲がりについて

○3m材の曲がりの許容範囲は、どの位なのか。

(講師より)

○ラミナを取っていない工場については、曲がっているとラインに乗らないので、直材でなければならない。

○3m材の曲がりは好ましくないが、山で苦勞して生産していることを知っているので、多少は受入をしている。

##### イ 寸切れについて

○曲がりもそうであるが、工場では寸切れが困る。伸寸を多く付けることについては、チェーンソーで切っており、工場では問題はない。

(オペレーター等より)

○高性能林業機械には、それぞれ性能や癖があり、調整しながらやっているが、長材になると皮や節による滑りで誤差が出る。この時期になると、わざと伸寸を多く付けて採材するように心掛けている。

○寸切れの問題は、生産業者の信用問題だ。造材をしてフォワーダの積込時に確認する方法もあるし、朝や昼の作業前にハーベスタやプロセッサの調整を行えばよい。

##### ウ ガニ腐れについて

○ガニ腐れは、どの程度まで許容範囲なのか。

(講師より)

○木口を見て、100～200本巻きで、ガニ腐れが目立つ物件は好ましくない。ただし、シミ程度の物は使える。製材して穴が開くほどでは使えない。少しあるのは、仕方がないと考えている。

○木口に出なければ分からない。一般的に仕方がない（運だと）と思う。その対策をどのようにしていくのかは、製材屋の技術もあると思う。木口にガニ腐れが多いと好ましくないが、値段で調整できる場合もある。

○年間の仕入れの中で、ガニ腐れが全く混入しないということはありません。軽微なものは引き取っているが、蟻が入っているようなガニ腐れは使えない。製品ができそうな材については、相談しながらやっていかなければと考えている。

## エ 川上・川下の認識の共有に向けて

○今日の現場は条件の良い所であったが、ほとんどの現場は条件が悪い。丸太を採材する時は、機械に乗っているオペレーターが瞬時に行くことが多いので、製材所から生産現場に来て、丸太の価格等について直接話をしてもらえれば良いと思う。

（講師より）

○採材は、机の上でやるようには上手く行かないと思う。現在、付き合いのある生産業者には製材所に来ていただいて、実際に挽いている丸太、製品を見てもらっている。そうすると、「ここまでのガニ腐れはいいのか」、「ここまでの曲がりはいいいのか」など、自分の目で確かめて行ってもらえる。そのような関係をもっと築いていきたいと思うので、是非、製材所に足を運んでもらいたい。



意見交換会の様子

## 5 おわりに（今後の課題）

今回の勉強会では、川上・川下の双方で採材予想の目合わせや議論をすることができ、有利販売に繋がるような機会になったと考えています。

一方で、良質材生産のためには、より一層双方が連携し取り組んでいくことが重要であり、特に川上においては、製材工場に出向いて実際に挽いている丸太、製品を確認するなど、川下とのコミュニケーションを促進する必要があると考えています。